

---

---

# 下水文化研究発表会

---

---

下水文化研究発表会は、日本下水文化研究会にとって根幹となる事業のひとつである。ここでは、研究発表会と同時に開催されたシンポジウムのテーマについて、その足跡をたどっていくことにする。

## 1. 下水文化研究発表会の足跡

下水文化研究発表会は、本会が全国組織となる 1992 年の前年に第 1 回が開催された。その後、隔年で開催し、最新では、2017 年度に第 14 回研究発表会が開催されている。下水文化研究発表会は、会員にとって会の活動への参加機会であり、日ごろの研究成果を持ち寄り、そこでの議論等は情報交流・共有となり、次への研究の方向性を考えるチャンスとなる。

本会は NPO であり、本会が開催する研究発表会は学会の発表会とは趣が異なり、開放的であり、会員以外の他の市民団体の活動成果などの発表の場となってきた。そのよい例が、のちに国立市長となられた上原公子氏が、第 3 回研究発表会で、市民活動として測定されてきた都市河川の水質調査結果をもとに水質変化について考察した論文に優秀論文賞を授与したことである。幅広い参加を受け入れるため、学術的な審査は行わない。特定の製品の宣伝や人物や団体への誹謗中傷にあたるようなことがなければ歓迎するという方針で臨んできた。一方で、研究者にとっては、研究業績になりにくいという面があるのも否定できない。

論文募集は、下水文化史分野、下水文化活動分野、下水文化研究分野の 3 分野で募集を行ってきたが、海外活動を始めてからは、海外下水文化分野を加え、その後下水にとらわれずに広く論文を募る意図から、水文化、水文化活動、水文化研究、海外水文化分野と改めた。研究発表会は、2 回の大震災の年、すなわち 1995 年と 2011 年にも開催しており、これらの年には、論文募集分野として、「震災と下水道」、「危機管理」を加えた。

開始当初から、優秀論文賞を選考してきたが、応募論文数の減少と投稿者の固定化から、第 9 回以降は見送ってきた。その後、2013 年度に開催した第 12 回から、水環境保全に関わる政策論、事業経営論をテーマとする優秀論文に対して「久保起下水文化賞」、海外援助政策、援助活動の実践をテーマとする優秀論文に「バルトン記念賞」を授与することとした。これまで、久保起下水文化賞の該当者はなく佳作が 2 名、バルトン記念賞は本会の海外技術協力事業の成果に基づいて書かれたチームによる論文 1 編に授与されたほか、2 名が佳作を受賞している。つまり、この二つのテーマを扱って、優秀論文と認められた論文は、これまで 1 編のみとなっている。

表-1 に、これまでの下水文化研究発表会の開催地、分野別発表論文数、そのうちの会員による発表など、これまでの経緯を整理する。表-1 には、併せて行ったシンポジウムのテーマなどもあげている。開催地は基本的に東京である（記載のない場合は東京開催）が、表にあるようにこれま

表一-1 これまでの「下水文化研究発表会」

開催年	開催地	発表論文数（誌上発表を含めない）				論文数		うち会員（連名含む）		シンポジウムテーマ		
		文化史	活動	研究	海外	特別*	発表計	誌上	計			
第1回	1991			11	10	22		43				
第2回	1993			10	5	10		25		基調講演：高橋裕「水との付き合い方の変遷～多摩川を例にして」 特別講演：嘉田由紀子「環境問題と下水文化～その生活文化論的アプローチ」		
第3回	1995	小平		7	6	5	5	23	23	特別講演：間片博之「時代を映す都市河川～東京の区部河川について」 特別講演：松田旭正「『ふれあい下水道館』建設の経緯」		
第4回	1997			7	7	7		21	21	基調講演：辰濃和男「一滴の水」 水文化のネットワークを指して～市民の役割・行政の役割		
第5回	1999			9	8	8		25	25	18環境ホルモン		
第6回	2001	大津		3	15	5		23	23	13記念講演：久保起「日本における下水道論の歴史的要因・視点及び最近の発展と21世紀への道」 21世紀の下水道事業～進化下水道の視点から		
第7回	2003			6	2	8	6	22	22	13基調講演：Bilqis Amin Hoque「途上国における衛生改善への挑戦／好機」 途上国に適した衛生技術をいかに普及させるのか		
第8回	2005	大阪		6	6	5		23	23	13基調講演：松井章「古代宮都と汚水処理～尿尿と汚水処理」 水環境と歴史		
第9回	2007			4	1	3	5	13	10	10生活改善技術と地域社会の需要		
第10回	2009			4	3	1	3	11	5	2	11「水制度改革国民会議」の活動に関わる講演2題	
第11回	2011	大阪		5	4	4	5	20	9	5	14（基調講演：稲場紀久雄「歴史に学ぶ環境危機克服のポイント～私の下水道進化論」）	
第12回	2013			3		3	8	14	9	5	13下水道博物館	
第13回	2015			2		2	3	7	3	7	2	9これから流域水循環制度～水循環基本法をふまえて
第14回	2017			3		1	4	8	8	8	8	8サステナブルな援助とは

\*特別の募集分野は、「震災と下水道」(1995)、「危機管理」(2011)

で天津、大阪、東京郊外であるが小平でも開催した。天津での開催は、滋賀県で開催された世界湖沼会議のサイドイベントである自由会議として開催したものである。開催地が限られていることから、第10回以降、誌上発表の応募も受け付けており、海外（海外技術協力活動を実施しているバングラデシュからであるが）からの応募もある。

## 2. シンポジウムのテーマ

研究発表会とシンポジウムを併せて行うようになったのは、第4回からで、以降ほぼ毎回企画されている。それまでは、いくつかの基調講演、特別講演が行われていた。シンポジウム（フォーラム、セミナーなどの呼称を付けていることもあるが、あるテーマについて、複数のディスカッサーが講演するパネルディスカッションスタイルをシンポジウムということにする）は、偶数年、すなわち研究発表会の非開催年に行われていた。これについては、表-2に示すが、1990年代には、「見える下水道」、「環境教育」、そして、第4回研究発表会の際に開催された「行政と市民のネットワーク」といった、下水文化を市民の間にも普及させようという意図が強かったと感じられる。このことは、2000年の「人と水との関わり・人と水との距離を近づけるために」といったタイトルからもうかがわれる。このような姿勢は、「下水文化を見る会」のところで紹介する「見える下水道」シンポジウムで提案した「見える下水道にする提言」が出発点になっているようである。これは、主要な施設が地下にあり、大規模な下水道システムでは下水処理場も遠隔にあるところから、市民にとって、可視化しにくい下水道を身近な存在として意識できるように、行政側にも積極的に働きかけようとするに、活動の重点を置いていたことを示しているように思われる。その後、下水文化の市民への普及に関わるテーマが取り上げられる頻度は低下したとはいえ、第12回で「下水道博物館」をテーマにしていることから分かるように本会活動のひとつの柱となっているということでは一貫している。

1996年には、前年に発生した阪神淡路大震災を踏まえ、シンポジウム「大震災と人々の暮らし」が開かれている。このシンポジウム会場に近い小平市ふれあい下水道館では、本会の設立5周年記念事業として、WKバルトン撮影の濃尾大震災の写真集を含む「三大地震写真展」を開催していた。なお、写真集「三大地震と人々の暮らし」の出版も設立5周年記念事業として行われた。優れた一連の企画であったと言えよう。

1999年の研究発表会シンポジウムでは、環境ホルモンがテーマとなった。化学物質に起因する健康リスクについての議論がわが国で行われだした時代で、NPOが市民、行政、研究者をつなぐ、リスクコミュニケーションの核となる可能性などが議論された。

2000年には、本会関西支部、全国上下水道コンサルタント協会関西支部、水道事業活性化懇話会の共催で、上下水道の財政問題に深く切り込んだ議論を行い、パネルディスカッションで議論された内容を政策提言としてまとめている。シンポジウムのテーマとしてみれば、制度論を取り上げたのは、本会にとってはじめてのことであり、水循環基本法制定へ向けた議論、さらには制定後の水循環狩制度の議論（第13回）につながっていく。なお、この年以降、研究発表会非開催年のシンポジウムは企画されていない。

2001年の世界湖沼会議の自由会議として開催した第6回は、周到な準備のもとに行われた。この会は、久保起氏を基調講演者に招待し、英文で40ページを超える論文を執筆していただいたことが印象に残る。また、マレーシアから下水道の民営化の事例報告をしていただくため、スピーカーを呼ぶこともした。最後に、進化する下水道として市民の排水責任を含めた社会規範の醸成を求める提言を行った。

2003年は、本会の海外技術協力事業のキックオフとなる研究発表会であった。来日中であったバングラデシュのNGO代表に基調講演を依頼し、バングラデシュにおいて、衛生改善活動をスタートさせるきっかけとなった。4年後の2007年は、技術協力活動の実績や経緯を題材にシンポジウムを企画した。

表－2 研究発表会非開催年に企画されたシンポジウム

年	シンポジウムテーマ	掲載機関誌
1992	見える下水道にするためのシンポジウム、「見える下水道にする提言」	6号
1994	下水道をめぐる環境教育シンポジウム	7号
1996	地震に関するシンポジウム「大地震と人々の暮らし」	9号
2000	“これからの人と水との関わり” 基調講演：萩原良巳「下水道のブレークスルー」／パネルディスカッション「人と水との距離を近づけるために」 “水環境セミナー” 基調講演：石田雄弘「国・地方の財政状況と上下水道事業の展望」／パネルディスカッション「上下水道事業は終わっていない」 (大阪開催：水コン協関西支部等と共催)	13号

2005年と2011年は大阪で開催された。関西在住会員の発表機会となるようにとの意図があるが、2011年は東京開催での応募論文数が少なくなることが懸念されたことも理由になっている。2005年は「水環境と歴史」をシンポジウムテーマとし、都市によって、水利施設の相違することなどが議論された。

2009年と2011年では、2008年に発足した「水制度改革国民会議」の活動に関わる基調講演等が行われ、2014年に施行された「水循環基本法」のもとでの水循環管理制度について2015年の研究発表会でシンポジウムが行われた。

2013年のシンポジウムが「下水道博物館」であり、本会が関与・支援してきた下水道博物館情報交流会議が行われなくなった後、2012年から行った実態調査等に基づいて議論がなされた。

2017年は、10年を超える海外技術協力事業をふりかえる意味で、バングラデシュにおいて、「水と衛生」に関わる活動を担ってきた方々をディスカッサーに招待し、これからの技術協力の在り方について議論がなされた。

以上、シンポジウムのテーマについて振り返ったが、「下水道の見える化」に代表される人と水との関わりの再考、「水循環管理のための制度論」や「下水道事業経営論」そしてNPOとしての国際協力のあり方が代表的なシンポジウムのテーマとなってきたことが分かる。

### 3. 論文数等の推移

表-1に論文数等を示したが、全国組織として設立前に行われた第1回下水文化研究発表会の発表論文数は43編であった。その後、第8回までは、21～25編を維持してきたが、2007年開催の第9回以降は、大阪開催の第11回を除いて、応募者数には、顕著な減少がみられる。とくに最近では会員以外の論文応募が限られている。分野別では、水文化活動分野の論文応募がここ何回かない状況である。こうした点については、通史のなかで、会員減少など他の点と併せて議論しているのでここでは繰り返さないが、打開策が求められている。

(酒井 彰)